

帝国の「中心都市」プラハ

はじめに

チェコの首都プラハは、九世紀から十世紀にかけて
ブシエミスル家による統一国家が成立して以来、常に
その中心都市の地位にあった。ヴルタヴァ川左岸にあ
るプラハ城はブシエミスル家の国家の政治的中枢であ
ったが、九六七年にその城内の聖ヴィート大聖堂にチ
ェコで最初の司教座が置かれたことによって、ここは
また宗教的中心にもなった。そして城のすぐ下のヴル
タヴァ川渡河地点を中心に広がる集落は、チェコのほ
ば中央という位置も幸いして、人や物資の集まる最も
重要な都市として発展した。

薩 摩 秀 登

さらにこの都市はルクセンブルク家の二人のドイツ
王カール（チェコ語名カレル）四世（在位一三四六
～一三七八年）及びヴェンツェル（チェコ語名ヴァー
ツラフ、在位一三七八～一四〇〇年）のもとで、神聖
ローマ帝国の中心としても位置付けられた。カール四
世時代のプラハの人口は三万人から四万人と推定され
ており、当時のアルプス以北の都市の中では最大規模
であった。単に人口が多かったばかりでなく、一四世
紀のプラハでは帝国の「首都」にふさわしい内実と外
観を備えるべく、多くの試みがなされている。

しかしこうした繁栄の時代のすぐ後、一五世紀のプ
ラハはフス派戦争（一四一九～一四三四年）時代を迎

える。カトリック教会側から見れば「異端」であったフス派は、一四世紀末から一五世紀にかけてチェコの社会が抱えていた様々な矛盾に対する、ブラハの住民を中心にした対応が一つのきっかけとなって生まれた宗派であった。またフス派運動の背景には一種の民族的反感、すなわちチェコ人とドイツ人の対立という要素が明らかに見られるが、これも数百年にわたるチェコ人とドイツ人の共住の結果であり、その影響が最もはつきりと現われたのがブラハという都市だったのである。

このように一四世紀から一五世紀初頭のブラハは、中欧随一の大都市として発展するという一側面を見せつつ、その直後に中世後期ヨーロッパで最大の宗教的「民族」的要素の入り混じった闘争の舞台となったという点で、他のヨーロッパ諸都市に見られない独特な展開を見せている。そこで本稿では、こうしたブラハの「中心都市」としての性格が実際にどのように形づくられ、それが市民にどのような影響を及ぼしたかを考えてみることにする。⁽²⁾

一 チェコ王国におけるブラハの位置

チェコ王国では一三世紀の二〇年代から、植民活動によって急速に都市網が形成されていった。それらの中には世俗貴族が自分の所領に建設した都市もあるが、主要な都市のほとんどは国王都市であった。⁽³⁾一二八一年には市民が初めてラント議会に参加した記録があるが、その後の市民の政治的活動は市の領域内部に限られていき、国政にはほとんど関与していない。

この点でやや例外的なのは、ブラハと、銀鉱を中心急速に発展したクトナー・ホラであった。この二都市の代表は、プシエミスル家断絶(一三〇六年)後、ルクセンブルク家をチェコ王に招くための外交交渉に、高位聖職者や世俗貴族とともに参加している。その後も、ヨハン(在位一三一〇〜一三四六年)が貴族たちと対立し、その権力が安定しないのを見たブラハの有力市民たちは、一三一九年に一部の貴族と結んで公然と王に対して反抗する態度を見せた。⁽⁴⁾この企ては失敗に終わったが、王がチェコ国内では権力を確立できなかった

ったヨハンの時代は、王権からの都市の「解放」が、ある程度進んだ時期と考えてよいだろう。国王都市に對する王領地管理官(subcamerarius, podkomorí)の権利を制限した一三三七年のヨハンの証書はブラハには直接関係ないが、「筆頭の」都市であったブラハも同様に自立性を高めたことは推測し得る。王が実質不在であったヨハンの時代には、貴族たちがブラハに集まって国政を掌握しており、市民が関与する余地を与えなかったが、しかし貴族たちも都市の内部問題にまでは介入することができなかった。

しかしカール四世の時代になると事情は一変し、国王権力が安定へと向かう。それに従ってブラハの地位も比較的安定するようになったが、しかし王権による都市の管理もそれまでよりずっと厳しいものとなった。ブラハ(旧市街)、クトナー・ホラのほか、一三二〇年代に帝国都市からチェコ王国に編入されたヘブと、一三四八年にカールによって創設されたブラハ新市街を含めた四都市は、国王都市の中でも特別の地位にあり、王領地管理官の管轄外に置かれ、王が直接掌握する形

になっていた。ブラハ旧市街では一四世紀後半になって参審人団体から参事会が独立するが、そのメンバーは市民によって選出される建前になっていたものの、実際には王の意向で決められていた。参事会の権限はほとんど市内だけに限られ、そうした状態はフス派戦争勃発まで続いたのであった。

以上のようにブラハの新・旧両市街は、国王都市の中でも特別な地位を認められていながら、王権との深い結びつきのためにその影響を直接に被ることは避けられなかった。チェコ王、ドイツ王、皇帝を兼ねたカール四世はこのブラハを拠点に帝国政策を展開していくことになる。⁽⁶⁾ そうした彼の活動がどのような変化をブラハにもたらしたかを次に見てみたい。

二 帝国の中心としてのブラハ

カールはすでに一三四四年に教皇クレメンス六世との交渉によってブラハ司教座を大司教座に格上げし、四百年近く続いたマインツ大司教座との結びつきを絶った。同時に聖ヴィート大聖堂のゴシック様式による

建て替えが始められ、チェコの教会の威信を示すことになった。さらに一三四八年にはやはり教皇の認可に基づいてブラハに中欧で初の大学が創られた。パリ大と同じく四学部によって構成されるこの大学は、皇帝の居所であるブラハの権威を高め、広くドイツの各地域からも多数の学生を集めた。同じく一三四八年にはブラハ新市街が創設されている。これによってブラハの市街地面積は一挙に三倍に広がった。旧市街と新市街は完全に独立した二つの都市であり、それぞれに参事会有り、両者は城壁で隔てられていた。新市街の城壁と市街地の建設は短期間のうちに進められた。カールは大きな商館の立ち並ぶ商業都市建設を考えていたらしいが、実際には新市街の住民には手工業者が多かったといわれる。

また一三四八年にはブラハ近郊に、帝冠や宝物を収めるための場所としてカルルシュティン城の建設が始められた。

新しい聖ヴィート大聖堂には、チェコの代表的聖人である聖ヴァーツラフ(ヴェンツェル)に捧げられた

特別の礼拝堂が備えられ、ルクセンブルク家が帝冠とともに伝統的なチェコ王冠をも受け継いでいることを象徴した。また、新市街のポトスカリー地区に新設されたベネディクト派修道院は「スラヴ語」で典礼を行なうための修道院とされ、ダルマティアの修道士たちが呼び寄せられた。カールの抱いていたブランによれば、帝国は「スラヴ語」世界に対しても開かれた影響力を持つべきものであった。

そしてその帝国の中心として位置付けられたのがチェコ王国の首都ブラハであった。父ヨハンと違って、チェコで生まれて幼年時代を過ごした経験を持ち、またチェコ王即位以前からモラヴィア辺境伯としてチェコ王国の政治に関わってきたカールは、チェコだけでなく帝国統治の重点をもブラハに置くことを考えていたのである。⁽⁷⁾

では実際にカールの時代に、ブラハはどの程度まで帝国の中心として機能したのか。これをP・モラフは皇帝自身および宮廷関係者たちの行動を跡付けることによって分析した。⁽⁸⁾ 当然ながら、帝国統治の概念その

ものが一四世紀の独特な性格を帯びているので、「中心的機能」もまた当時の条件に合わせて捉えられなければならない。特に留意するべき点としてモラフは、①一箇所の宮廷による支配「Residenzherrschaft」と移動しながらの支配「Reisesherrschaft」とは大きな違いではないこと、②皇帝の意志がどのような手段と方法で伝達されたかを見るべきであること、③特別に中心形成的作用をもたらすものとして宮廷議会と帝国議会があるが、この両者は当時まだほとんど区別されていなかったことをあげる。特に③は、チェコではプシエミスル家時代も含めて一度も帝国会議が開かれていないことを考えた場合、ブラハの中心的機能を判断するために重要な点である。これに関連して、チェコ王国統治と帝国統治がカールとその周辺人物たちによってどの程度区別されていたか、あるいはいなかったかという問題も生じるが、この点は別の機会に譲ることにして、ここではモラフの分析に従ってブラハの中心的機能を示すいくつかの事実に触れておこう。

カールの時代には、帝国統治の軸となる東西の線が

存在した。その西端はフランクフルト・アム・マイン、東端は現ポーランド領のヴロツワフ（ブレスラウ）で、ニュルンベルクとブラハがこの軸上の二大中心点となる。カールは在位期間三十二年のうち九年から十年をブラハで過ごし（ただしカルシュティーンなど周辺の城も含む）、二年半から三年をニュルンベルクで過ごし、ヴロツワフ滞在期間はブラハのほぼ十分の一、フランクフルト滞在期間はニュルンベルクのほぼ十分の一である。これだけでカールの在位期間のほぼ半分に達するが、残りの半分は帝国の外も含めた非常に多くの場所を移動しており、四百三十八箇所の滞在が証明できる。これが、カールにとってブラハが「本拠」であつた事実を際立たせる。⁽⁹⁾しかし同時にニュルンベルクの地位も劣らず重要であり、財政、外交、軍事などの分野ではむしろこちらの方が中心であつたことも見逃せない。

宮廷での活動のためにブラハに長期間滞在した人物は、カールの発行した証書の内容や証人リストから突きとめられる。チェコ王国に属する諸侯（ヴロツワフ、

オロモウツ、リトミシュルの各司教、モラヴィア辺境伯、オバヴァ大公) およびチェコとモラヴィアの有力貴族たちは、宮廷に出向いていただけでなく、ブラハ滞在用の住居をも構えていた。

チェコ王国以外の諸侯でも、ブラハにある程度長期間滞在している例が見られるが、モラフはこれらの人物が①選挙侯、②「王に近い」地域の諸侯、③チェコのヘゲモニーのもとにある地域の諸侯、のどれかに必ずあてはまるとしている。①ではマインツ大司教が(恐らく選挙侯中の首位者として)宮廷に滞在する期間が最も長い。②に含まれるのはフランケン、シュヴァーベン、エルベ中流域の伯たちであるが、彼らはブラハに住居は構えず、宮廷に滞在してその費用を皇帝から支給された。③でいう「チェコのヘゲモニー」は、あくまで皇帝カールの統率力によって一時的に成り立ったものだが、このヘゲモニーのもとにあった諸侯としては、ザクセン・ヴィッテンベルクの選挙侯が代表的であるという。モラフは、やや誇張であると断った上で、ブラハがこの選挙侯にとっても本拠

Hauptresidenzであったと述べている。⁽¹⁰⁾ 以上のようなブラハの「中心的」性格と、カールが長期の交渉の後一三七三年に、ブランデンブルクを獲得してチェコ王冠に結びつけたことを考え合わせると、カールはブラハの「首都」的性格の及ぶ範囲を、チェコ王国からしだいに帝国の広い地域へと拡大させる意図を持っていたことが読み取れる。その広がりとは今日中欧と呼ばれる地域と一部重なっているといえるだろう。

次にブラハが帝国で何らかの制度的な中心の役割を果たしたかどうかであるが、モラフは、中世後期にはまだ制度の働き自体が個人の活動に基づくものであったことを強調し、カールと本来個人的には無関係でありながらブラハで勤務した人物をあげる。代表的なのが、サレプタ、シュレスヴィヒ、ミンデン、マクデブルクなどの司教を歴任したシトー会士ディートリヒ・フォン・ボルティツである。彼は一三五七年三月二日より少し前にチェコ王国の収入すべてを抵当として委ねられ、一三六二年に決算が行なわれるまで王国の財政をほぼ一手に引き受けている。さらに一三六〇年に

はドイツに関しても同じような資格が与えられた。彼に委ねられた権利は、帝国都市やユダヤ人からの税徴収も含むものであった。そして彼はこの活動のために、ブラハに独立した尚書局 *Kanzlei* を備えていた。この尚書局は彼の活動期間中だけ存在したものであって、その意味では個人的組織であったが、カールがブラハにいない間も活動を続けていた点が注目され、移動する宮廷の一種の「支部 *Außenstation*」的な性格を持っていた。その職掌の及ぶ範囲は王領地からチェコ以外の帝国各地にまで及んでおり、行政官、財政担当者としてのデイトリヒは、短い期間、王領地、「王に近い」地域、チェコのヘゲモニーのもとにある地域の區別を薄れさせたといえる⁽¹¹⁾。

またドイツ王の宮廷裁判所はほぼ王とともに移動しながら、ブラハでも、チェコ以外の都市でも開かれた。宮廷裁判官として最も重要だったのはシュレジエンの大公たちであったが、彼らはほとんどカールと行動をともにしている。

財務局 *Kammer* に関してはあまり詳しくはわかつ

ていないとしながらも、モラフは宮廷財務局の中枢にいた人物たちの中にニュルンベルクなどの出身の市民たちが多く、互いに密な関係を結び合っていたことを指摘している⁽¹²⁾。

このように帝国の「要人」たちが集まったことの波及効果として、ブラハでは様々な経済活動がこれまでになく刺激されたことは容易に想像できる。

以上、モラフの指摘をいくつか紹介し、ブラハが帝国の中心としての機能をどの程度果たしていたかを見てきた。モラフは、ブラハの中心的機能が帝国全体に及んだわけではなく、中心を必要とした地域、そして王が政治的立場を主張できた地域に限られるとしながらも、カール時代のブラハには帝国の中心としての機能が認められるとしている。そしてカールの権力が絶頂にあった一三六〇年前後には、ルクセンブルク家の権力の拡張、ヘゲモニーの強化、王領地の拡大、場合によってはレーエンの充実という形で、帝国の構造を徐々に改革する機会を訪れていた。それはいわば、チェコを帝国に転化するのではなく、帝国をチェコの国

王支配地域に転化するという方法であった。もちろんこれが仮にも実現するためにはきわめて長い時間が必要なはずであり、結局はカールの時代にはんのわずかな可能性を示しただけで終ってしまったわけである。

カールのプランにとって妨げとなった要因としてモラフは①チェコの貴族たちが中央権力の切り崩しを図ったこと、②チェコ人としての独自の自覚(Eigenbewußtsein)の存在という二点を指摘している。さらにそれ以外にも、ブラハには帝国の中心としては明らかに不適合な要素がいくつか備わっていた。次にこれらの点を簡単に検討していきたい。

三 「中心都市」の矛盾

ブラハが帝国の中心としての機能を与えられることによって、チェコ王国以外の出身者、特にドイツ人の数が増えたことは間違いない。しかしブラハあるいはチェコ王国全体が、すでに一四世紀に入る前から、チェコ人とドイツ人の共住地域という性格を持っていた。それでも、単に言語や習慣が異なる人々が同じ地域に

住むだけでは、反発感情は生まれない。特にチェコ王国に何世代も住んでいるドイツ系住民の間では、言語的帰属よりも出身に基づいて、自分をチェコ人とみなす傾向もあったといわれる。⁽¹⁴⁾

しかし一四世紀初頭には、「通称ダリミルの年代記」に見られるように、チェコ人貴族の間にドイツ人に対する激しい憎悪があったことも事実である。この憎悪の源は、富裕なドイツ人商人たちがブラハなどの都市に住んで様々な特権を享受し、新たな慣習を持ちこみ、伝統的な貴族の地位を脅かしていることにあった。従ってこの年代記の作者の憎悪は、トーナメントなど異国の遊びにうつつをぬかす「最近の貴族たち」にも、同様に向けられている。

このように、一種の民族的意識と言えるものを最初に明確な形で作り出したのが、自分たちの特権的地位を危ういと感じた世俗の貴族たちであったことは、グラウスが特に強調するところである。⁽¹⁵⁾一三一〇年代にヨハンと貴族との間で起こった激しい闘争においても、「外国人」を国政の最高官職につけてよいかどうか

重要な争点の一つになっていた。

これに対してチエコに住むドイツ人の中には貴族は少なかった。カール四世時代にも、他所からチエコに来て「永住」した貴族は多くない。カール自身がチエコ人貴族の感情を配慮した結果とも考えられるが、いづれにせよチエコ人貴族たちから帝国出身者たちが潜在的不信感を持って見られているような状況では、ブラハは帝国の中心としては不向きであったと言わざるをえない。ただしこの問題は、チエコ統治と帝国統治がどの程度区別されていたかという、前にも指摘した問題と合わせて考える必要があるだろう。

チエコ人とドイツ人の対抗関係は、都市内部でも生じる可能性があった。その背景としては、圧倒的にドイツ人の多い富裕な商人層と、チエコ人の多い手工業者層との対抗が通常考えられてきた。しかしこの二種類の対抗関係を単純に重ね合わせることは問題があり、⁽¹⁶⁾しかもブラハでは一四世紀半ばに大きな争いもなく手工業者が市政に進出している。そのため、市民の間の政治権力闘争といったものに「民族」の対立が

絡むという可能性は、実際にはほとんどなかったように思われる。

ブラハ独特の構造としては、旧市街と新市街の対抗関係という要素も加わる。大雑把に言って旧市街ではドイツ人、新市街ではチエコ人が優勢であったのは確かだが、二つの市の対抗関係が単純な「民族的」反発に帰せられるものではなかったことはいうまでもない。

ここでは、ブラハの中心的機能のもう一つの結果として、ここが都市の本来の経済力に比べて過度に人口の集中した街になり、それが市民の生活にも強い影響を及ぼしたという点に注目してみたい。グラウスは一九四九年に出版された『フス派以前の都市貧民』で、一四世紀後半から一五世紀にかけてのブラハがかなり多くの「貧民 *chudina*」を抱えた街であり、しかもその生活はしだいに悪化する傾向にあったことを示した。⁽¹⁷⁾この研究は、都市が都市貴族（商人）と手工業者との二つの部分から成り立っていたとするメンドルらの研究を修正したものであるが、ここではブラハが特に多くの貧しい労働者などを抱えた都市であったことを

示すいくつかの例を紹介するにとどめよう。

聖ヴィート大聖堂の建設に際して支払われた賃金の一覧によれば、車を曳いたりクレーン用の車輪を回したりする日雇い労働者の数は、農村が収穫を迎える時期になっても減っていないという。またブラハのすぐ近郊にある教会所領で、刈取り、養魚池掘り、乾草刈りなどのために雇われた労働者の賃金は、聖ヴィート大聖堂建設のために雇われた労働者の賃金よりわずかに高い。また建設現場における熟練労働者(左官など)と非熟練労働者の賃金の比率を、ブラハとウィーン(聖シュテファン大聖堂の建設)で比較すると、ブラハでは両者の格差が大きく、明らかに非熟練労働者に不利であったことがわかる。(ブラハとヘブとを比べても同様である。⁽¹⁹⁾)

実際に「貧民」が都市人口のどの位の割合を占めたかは確定できない。しかしグラウスは、ブルノで一三六五年に市に税を支払っていない人の割合が四一％であったというメンデルの研究を引用し、人口の稠密性が高かったブラハではその割合はこれよりも高かった

だろうと推測している。⁽²⁰⁾

日雇い労働者の収入は、最高の条件のもとでも一週間に四〇六グロシユであった。グラウスは、ブルノの市参事会が「陣中」において領主に食事を供応する時の費用として一人分一日二グロシユを計上していることなどを比較の対象にあげて、「貧民」の生活の窮乏ぶりを強調している。⁽²¹⁾

紙幅の都合上、これ以上の紹介は省くが、一四世紀半ばのブラハに集中した人口が、市の持っている経済的許容力を越えたものであったことはほぼ間違いないであろう。この事情は、新市街の建設がほぼ終り、またカールの死後に景気が後退し、聖ヴィート大聖堂などを初めとする大がかりな建築活動が鈍ったことによって、さらに深刻になった。

ブラハの経済的發展には初めからいくつもの限界があったことが指摘されている。ヨーロッパを東西南北に結ぶ商業ルートは、山地に囲まれたチェコを避けるのが普通であった。この点をよく知っていたカールは、ヴェネツィア商人に、戦乱の危険のあったフランス方

面を避けて、ブラハを経由してバルト海方面へ向かうルートを提案した。そのためにドナウ川とヴルタヴァ川をつなぐ運河の建設まで計画されたが、実現には至らなかった。またブラハは基本的に「消費都市」であり、輸出にあてられるだけの重要な産業がなかったため、商業基地としての発展の道が閉ざされていたことは特に致命的であった。⁽²²⁾

この時代のブラハの性格を示すもう一つの重要な点は、周辺の農村を含めた都市支配領域形成が行なわれなかったことである。その原因については現在のところ充分には説明されていないと思われるが、二つの点を指摘しておきたい。まずチェコでは伝統的に土地に対する王の所有権の観念が強く、王領地に建設された都市の支配権は、市壁の外には及びにくかったと思われる。次にカール四世の時代において、ブラハの経済的發展は王も望むところであったが、ブラハ自体が一つの支配領域を形成することは、帝国の中心であり王の居所でもある都市という性格と、両立しにくい側面があったのではないだろうか。ブラハの富裕な商人層

は、財産ができると、農村部に所領を買い求めて自ら貴族化していく道を選んだのであった。

以上のように、一四世紀のブラハは王国および帝国の中心都市として位置付けられ、それにふさわしい政治的、文化的重要性を一時は備えたが、社会的、経済的にはそれに見合うだけの強固な基盤を持っていなかった。王によって設定された「中心的機能」は、都市自体の発展を促進することにはならず、むしろそれを抑えることにもなりかねなかった。そしてブラハはヴェンツェルの時代に入って中心としての性格が希薄になり、さらに一四〇〇年のヴェンツェルのドイツ王廃位によって、帝国の中心からチェコという一王国の首都の地位に転落することにより、一層深刻な事態を迎えることになったのである。

本稿の対象外であるが、こうしたブラハの矛盾、特に大量の「貧民」の存在が、フス派運動を生み出す大きな要因になっていたことはいうまでもない。グラウスは、一三八九年、一四一九年、一四二二年の三度にわたるブラハの民衆暴動の分析を行ない、これらがい

ずれも下層民による暴動であったと述べている。そして、一四二二年の穏健フス派に対する暴動では、下層民を含む急進フス派が一時的に市政を掌握したが、それを維持することはできなかった点などを指摘し、暴動が社会に与えた影響の大きさに比して、市民の構造の「機能」はもとのままであった点を強調している⁽²³⁾。

また、一四二〇年に、逃亡したカトリック系市民の財産が没収された時も、市民は市壁外の財産の獲得にまで奔走し、結果として財産所有者は交代したが、都市の支配を確立したり、市の構造を改めるための努力はなされなかったという指摘も重要である⁽²⁴⁾。こうした側面に注目するならば、カール四世時代以来のプラハが抱えてきた矛盾は、フス派運動によっても基本的には解決されなかったとも言えるかもしれないのである。

- (1) J. Mezník, *Der ökonomische Charakter Prags im 14. Jahrhundert*, in *Historica* 17 (1969), p. 47.
- (2) プラハの歴史 V. V. Tomek, *Dějepis města Prahy 3-5*, Praha 1875 ff. J. Janáček, *Dějiny Prahy*, Praha 1964.

- (3) 中世チェコの都市の地位については、拙稿「中世チェコ王国における国主都市の地位——裁判権を中心に——」『明治大学教養論集、社会科学、人文科学』二四三号(一九九二年)一七頁。

- (4) 拙著『王権と貴族、中世チェコにみる中欧の国家』日本エディタースクール出版部、一九九一年、第三章、第四章。

- (5) *Codex iuris municipalis Bohemiae* I. ed. J. Čelakovský, Praha 1886. no. 29, II. ed. J. Čelakovský, Praha 1895. no. 199, no. 200.

- (6) カール四世時代のプラハについては、他の註でもたびたびのほかに以下を参照。J. Spěváček, *Úloha Prahy v koncepci českého státu Karla IV.*, in *Folia Historica Bohemica* 10 (1986), p. 137-171; J. Mezník, Karel IV., *patriciát a cechy*, in *Československý časopis historický* 13 (1965), p. 202-217.

- (7) スベヴマーチェクは、こつしたカールのいわゆる *Bohemozentrismus* が帝国統治に効果をあげたことと関係する。J. Spěváček, *Prag zwischen West- und Osteuropa im Zeitalter der Luxemburger*, in *Historica* 30 (1990), p. 5-27.

- (8) P. Moraw, *Zur Mittelpunktfunktion Prags im Zeitalter Karls IV.*, in *Europa Slavica-Europa*

Orientalis, Festschrift für Herbert Ludat, Berlin 1980, p. 445-489. 以下の記述はこのモラフの研究による。

- (6) *ibid.*, p. 454 ff.
- (7) *ibid.*, p. 461 ff.
- (11) *ibid.*, p. 469 ff.
- (21) *ibid.*, p. 476 ff.
- (31) *ibid.*, p. 488 ff.
- (14) たとえば年代記作者 Peter von Zittau⁹ ラウシマンの都市ツィタウは一四世紀にはチヤホロ王領の首都であった。
- (51) F. Graus, Die Bildung eines Nationalbewußtseins im mittelalterlichen Böhmen, in *Historica* 13 (1966), p. 5-49; F. Graus, Die Nationenbildung der Westslawen im Mittelalter, Sigmaringen 1980.
- (91) J. Mezník, Národnostní složení předhusitské Prahy, in *Sborník Historický* 17 (1970), p. 5-30.
- (17) F. Graus, *Městská chudina v době předhusitské*, Praha 1949. ベラウスはツィッピは貧民を「都市に住む

独立して生産できず、従属的な地位で生活する必要に迫られている人々」と定義する。従って職人や、役人の下働きなども含まれるが、ツィッピでは単純労働者についての記述に絞ってつづいてみた。

- (28) B. Mendl, *Hospodářské a sociální poměry v městech Pražských v letech 1378-1434*, in *Český časopis historický* 92(1916).
- (61) F. Graus, *Městská chudina*, p. 38, p. 77-78.
- (20) *ibid.*, p. 87.
- (12) *ibid.*, p. 81-84.
- (32) F. Graus, *Prag als Mitte Böhmens 1346-1421*, in *Mittelalterliche Stadtgeschichtsforschung* A/8, hrsg. von Emil Meynen, Köln/Wien 1979, p. 22-47.
- (23) F. Graus, *Struktur und Geschichte. Drei Volksstände im mittelalterlichen Prag*, *Vorträge und Forschungen*, Sonderband 7, Sigmaringen 1971: p. 72-73, p. 92.
- (27) F. Graus, *Prag als Mitte*, p. 41-42.

(明治大学専任講師)